新約聖書 マルコによる福音書 7 章 24 節―37 節（新共同訳）

[24]イエスはそこを立ち去って、ティルスの地方に行かれた。ある家に入り、
だれにも知られたくないと思っておられたが、人々に気づかれてしまった。[25]
汚れた霊に取りつかれた幼い娘を持つ女が、すぐにイエスのことを聞きつけ、
来てその足もとにひれ伏した。[26]女はギリシア人でシリア・フェニキアの生ま
れであったが、娘から悪霊を追い出してくださいと頼んだ。[27]イエスは言われ
た。「まず、子供たちに十分食べさせなければならない。子供たちのパンを取
って、小犬にやってはいけない。」[28]ところが、女は答えて言った。「主よ、
しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」[29]そこで、イエ
スは言われた。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあな
たの娘からもう出てしまった。」[30]女が家に帰ってみると、その子は床の上に
寝ており、悪霊は出てしまっていた。
[31]それからまた、イエスはティルスの地方を去り、シドンを経てデカポリス
地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた。[32]人々は耳が聞こえず舌の回
らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるようにと願った。[33]そこ
で、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両耳に差し入れ、
それから唾をつけてその舌に触れられた。[34]そして、天を仰いで深く息をつき、
その人に向かって、「エッファタ」と言われた。これは、「開け」という意味
である。[35]すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すこと
ができるようになった。[36]イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけ
ない、と口止めをされた。しかし、イエスが口止めをされればされるほど、
人々はかえってますます言い広めた。[37]そして、すっかり驚いて言った。「こ
の方のなさったことはすべて、すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるよう
にし、口の利けない人を話せるようにしてくださる。」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「小犬もまた」

人生において、私たちは多くの出会いを経験します。

その多くの出会いの中に、「真の出会い」というものがあるでしょう。

神は、人の中に降り、人を通して、私たちに働きかけてくださいます。

ギリシア語の「ロゴス」とは、「真理」を表す言葉です。

ヴィクトール・フランクルはこう述べています。

「真の出会いとは、ロゴス（真理）に開かれつつ共に存在することである。それはパートナーに自らを越えてロゴスに向かわしめるものである。真の出会いとは、そうした相互的な自己超越を促すものである」。

さて、本日の福音書は、「ギリシア人でシリア・フェニキアの生まれ」―― つまり「異邦人」の女性と、イエスとの特別な出会いの話です。

ここには英知に満ちた女性の「ロゴス（真理の言葉）」によって、「神の恵みの豊かさは民族の境界線を越える」とイエスが説得されて考えを改めたという出来事が記されています。

この出来事は、イスラエル人の男性が、「異邦人の女性」の言うことをしかと聞き、それを「ロゴス＝真理（の言葉）」として受け止めたということでもありました。

当時、ユダヤ人は、自分たちを「選ばれた民」とし、それ以外のすべての国民・民族を「異邦人」と呼んではっきりと区別していました。

相手の言葉によって、イエスの方が考えを改めるという話は、四福音書内でこの箇所だけです。そしてそれは、当時の時代背景では下に見られていた「異邦人」かつ「女性」によって成されたのです。

イエスと女性の出会いの場は、異邦人の地、ティルスでした。イエスの評判は、この地にも届いていました。イエスがある家に入った時、「だれにも知られたくないと思って」いたのにも関わらず、人々に気づかれてしまいました。

ここには、イスラエルの外の地域でも人々を引きつける、イエスの姿が表わされています。イエスが移動するところではどこでもその栄光が輝きわたり、人々がイエスのもとに群がりました。

イエスがやって来ているという噂はあっという間に広まったのでしょう。「汚れた霊に取りつかれた幼い娘を持つ女」と記されているその女性が、イエスのもとにやってきます。彼女は、娘から悪霊を追い出してほしいと懇願します。

このような、悪霊払いや癒やしにまつわるやりとりは、マルコ福音書にこれまで多く記録されています。しかし、これまでと違うのは、この女性が「ギリシア人で、シリア・フェニキアの生まれ」であるという点です。彼女は異邦人であり、場所も、これまでのようにユダヤ人が住むガリラヤではなく、異邦人の地でした。

そして、救いを求める人に対するイエスの態度も、これまでとは違っています。彼女の願いをそのまま受けいれず、一見すると拒否の言葉を語ります。「まず、子供たちに十分に食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない」というのが、この女性の願いに対するイエスの答えでした。ここでの「子供たち」はユダヤ人を指し、「小犬」は異邦人を指しています。また、パンは「救い」を表しています。

イエスの拒否に対して、この女性は、非常に機知に富み、核心に触れたことを言います。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます」というのが、彼女の発したロゴス —— 真理の言葉でした。「小犬」は「子供たちの」パンを奪い取るのではなく、子供たちがこぼしたパン屑をもらうに過ぎないのだ、と彼女は語ります。

「主よ」とイエスに対する信仰告白をしているのは、マルコ福音書ではここだけしかありません。マルコ福音書でイエスを「主」と呼んでいるのは、この女性だけです。ユダヤ人はイエスに対して「先生」（ラビ）と呼んでいました。「先生」も尊敬の意味を表明していますが、「イエスが救い主である」という

ことは表していません。この箇所で、異邦人の女性だけがイエスを「主」と呼んでいることは重要な意味を持っています。彼女にとって、イエスは単なる「先生」（ラビ）ではなく、唯一の救い主だったのです。

イエスとは誰なのか、どのような存在なのかについての彼女の直観と、イエスの感性とがひとつの渦に巻き込まれ、融合し、イエスと女性の双方に変革を起こしました。イエスとこの女性の出会いは、イエスが民族、宗教的な境界線を突破し、彼女の側に踏み出す機会となりました。

この異邦人の女性の内に謙遜で忍耐強い信仰を見出し、心動かされたイエスはこう言いました。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった」。

女性が家に帰ってみると、イエスの言うとおり、子供から悪霊は出てしまっていました。イエスが病人をいやす時は、病人に手を置いたり、直接病人に声をかけたりするのが通常でした。しかしここでは、イエスは遠く離れたところでいやしを行いました。このような空間を越えたいやしは、マルコ福音書ではここ一回だけです。そして、このような空間を越えたいやしには、特に信仰が大切であることが示されています。

この女性の幼い娘は、汚れた霊に取りつかれていました。汚れた霊に取りつかれた娘がどのような状態であったのかは、ここでは語られていませんが、娘の母親であるその女性は、大変な苦労をしてきたのではないでしょうか。

娘がそのような状態でただでさえ大変なうえに、その苦しみを上塗りするかのように周囲からは蔑視され、差別されていたかもしれません。「心がけが悪いから、そのようになったのだ」などの中傷もあったかもしれません。

この女性からは、立派な人物として人から尊敬される立場にいたわけではない、社会の外側で「劣った存在」として肩身の狭い思いで暮らしてきた人物像が想像できます。

ですが、そのような女性が、イエスの考えをも改めさせるような、ロゴス ―― 真理の言葉を発したのです。

人は、何の過ちもなく清らかに生きていれば、真理に辿り着けるわけではないのだと思います。

人は、自分の内に罪・穢れを感じる思いがして苦しんだり、深い心の痛みを乗り越えてこそ、ロゴス ―― 真理に辿り着くことができるのではないでしょうか。

悲しみのあとに、喜びがあります。

イエスの起こした奇跡に驚嘆した人々は、こう言いました。

「この方のなさったことはすべて、すばらしい」。

今年も、９月に入りました。

私たちは、日々、祈り、悔い改めながら、神への賛美と感謝のうちに共に歩んでいきましょう。

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

旧約聖書 イザヤ書 35 章 4 節―7 節 a（新共同訳）

4 心おののく人々に言え。「雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。
敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる。」5 そ
のとき、見えない人の目が開き／聞こえない人の耳が開く。6 そのとき／歩け
なかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う。荒れ野
に水が湧きいで／荒れ地に川が流れる。7 熱した砂地は湖となり／乾いた地は
水の湧くところとなる。

新約聖書 ヤコブの手紙 2 章 1 節―17 節（新共同訳）

1 わたしの兄弟たち、栄光に満ちた、わたしたちの主イエス・キリストを信
じながら、人を分け隔てしてはなりません。2 あなたがたの集まりに、金の指
輪をはめた立派な身なりの人が入って来、また、汚らしい服装の貧しい人も
入って来るとします。3 その立派な身なりの人に特別に目を留めて、「あなた
は、こちらの席にお掛けください」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこ
に立っているか、わたしの足もとに座るかしていなさい」と言うなら、4 あな
たがたは、自分たちの中で差別をし、誤った考えに基づいて判断を下したこ
とになるのではありませんか。
5 わたしの愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は世の貧しい人たちをあえ
て選んで、信仰に富ませ、御自身を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者
となさったではありませんか。6 だが、あなたがたは、貧しい人を辱めた。富
んでいる者たちこそ、あなたがたをひどい目に遭わせ、裁判所へ引っ張って
行くではありませんか。7 また彼らこそ、あなたがたに与えられたあの尊い名
を、冒涜しているではないですか。8 もしあなたがたが、聖書に従って、「隣
人を自分のように愛しなさい」という最も尊い律法を実行しているのなら、
それは結構なことです。9 しかし、人を分け隔てするなら、あなたがたは罪を
犯すことになり、律法によって違犯者と断定されます。10 律法全体を守ったと
しても、一つの点でおちどがあるなら、すべての点について有罪となるから
です。11 「姦淫するな」と言われた方は、「殺すな」とも言われました。そこ
で、たとえ姦淫はしなくても、人殺しをすれば、あなたは律法の違犯者にな
るのです。12 自由をもたらす律法によっていずれは裁かれる者として、語り、
またふるまいなさい。13 人に憐れみをかけない者には、憐れみのない裁きが下
されます。憐れみは裁きに打ち勝つのです。
14 わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴
わなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことが
できるでしょうか。15 もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食
べ物にも事欠いているとき、16 あなたがたのだれかが、彼らに、「安心して行
きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい」と言うだけで、体に必
要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。17 信仰もこれと同じ
です。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。

教会讃美歌　189 番「主のみことばに」1,2 節、238 番「いのちのかて」1,2 節、239 番「ひととなりたる」1,2,4 節、260 番「主イェス・キリストよ」1,2,4 節、199 番「主よいま去りゆく」1,2,3 節